

科目区分：コースの専門教育科目（小学校サブコース，中等教育コース・家政）

授業科目名：食物学

着任 10 年目でのコロナ禍における「食物学」の授業（2020）

家政教育講座 岡本威明

1. 授業概要と授業形態について

授業科目「食物学」は，家庭科教員免許の必修科目であり，食生活の基本となる食品成分と栄養の基礎知識について講義している。特に，五大栄養素については必ず理解してもらうことにしている。授業に関連する DP として，DP1（知識・理解），DP2（思考・判断）を中心に掲げた。今年度も，授業前に小テストを 13 回実施し，学生からのコメントシート（質問）に毎時間積極的に答えていく学生参加型の丁寧な授業形態を試みた。

授業形態について，コロナ禍ではあったが，1 回生科目で，家庭科教員免許取得における必修科目であることから，教育学部長の許可を得て，1～13 回は対面型（402 教室）にて，また 14・15 回は遠隔同期型（zoom 使用）の授業形態で実施した。

2. 受講生について

当初，受講生は小学校サブコースの学生が 10 名，中等教育コース（家政）4 名の計 14 名であったが，最終授業に至るまでに 2 名の履修者（いずれも小学校サブコース）が受講を途中でとりやめ，最終試験においては 12 名が受験した。また，学生による DP と対応づけた授業評価調査は，サイトにアクセスする方式で，2 月 12 日に実施し受験者全員である 12 名分のデータを回収した。

3. 授業評価（DP 対応）の質問事項とその結果

授業評価アンケートは，選択式（4 項目）で行った。選択式の評価は，とても思う，ある程度思う，あまりそう思わない，授業の目標・内容が DP と無関係である，の 4 段階で評価してもらった。

A) 知識・理解：教育と教職に関する確かな知識と得意とする分野の専門的知識を修得している。

【結果】「とても思う」8 名，「ある程度思う」4 名であり，受講生全員にとって知識・理解においては，納得のいく授業であったと推察された。

B) 技能：教育活動に取り組むための十分な技能を身につけている。

【結果】「とても思う」5 名，「ある程度思う」6 名であり，「あまりそう思わない」1 名であった。技能の面においても，受講生の大半は満足のものとなっていたが，小学校サブコース 1 回生の受講者 1 名が「あまりそう思わない」と答えており，来年度に向けての課題である。

C) 思考・判断・表現：教育現場で生じているさまざまな現代的諸課題について，専門的な知見をもとに，その対応方を理論に基づいて総合的に考え，その過程や結果を適切に表現することができる。

【結果】「とても思う」7 名，「ある程度思う」4 名であり，「あまりそう思わない」1 名であった。受講生の皆さんにとって思考・判断・表現においては，納得のいく授業であったと示唆されたが，小学校サブコース 1 回生の 1 名の受講生が「あまりそう思わない」と評価していた。前述の技能の評価のところでも該当の受講生は同様の評価であった。来年度に向けての反省点である。

D) 興味・関心・意欲，態度：教師としての使命感や責任感を持ち，自己の課題を明確にして理論と実践とを結びつけ

た主体的な学習ができ、自主的に社会に貢献しようとする。

【結果】「とてもそう思う」6名、「ある程度そう思う」6名であった。興味・関心・意欲、態度において、十分納得のいく授業であったと考えられる。

上記のアンケート結果より、4種すべてのDPの要素において、「そう思う」とポジティブに答えた学生は、92%を超えており、特に「知識・理解および興味・関心・意欲、態度」の面では100%であった。来年度も、この評価を是非とも維持させたい。

次に、この授業で出された課題や予習・復習のために、授業時間外に費やした学習時間は平均で一週間に何時間程度ですか？の問いに対して、1名を除く受講生の全てが30分以上と答えており、中には2.5時間と答えた学生もいた。その学生の最終的な評点は92点であり、普段の勉強に対する姿勢が得点に表れていると考えられる。

また、この授業で出された課題や予習・復習をおこなうこと以外の理由で、この授業に関連して時間外に費やした学習時間は平均で一週間に何時間程度ですか？の問いに対しても、7名の受講生が30分以上と答えており、中には2.5時間と答えた学生もいた。本授業に関連してどのような形で学習したのかは不明であるが、その学生の最終的な評点は93点であり、取り組んだ学習が最終試験に対してポジティブに作用したのだと推測された。

最後に、この授業をきっかけにして取り組んだ、教育実践や授業時間外での制作等の自発的活動は何件ありますか？の問いに対し、中等教育コース（家政）の学生1名および小学校サブコースの学生1名がそれぞれ1件と答えていた。本授業内容が、教育実践等での制作等に活用されていることが確認された。どのような形で応用したのが後日、確認してみたい。

4. 教員個別アンケートによる学生の授業態度、授業満足度、授業内容の評価、重要性、活用性の分析

最終試験時に、学生12名を対象として以下5つの質問アンケートを実施し、5段階

で評価して頂いた。5段階評価の詳細は、5:そう思う（非常に良い）、4:ほぼそう思う（良い）、3:どちらともいえない（普通）、2:そう思わない（悪い）、1:まったく思わない（非常に悪い）である。

①授業に出席し、授業を積極的に受講しましたか？ 結果、平均 4.75 点

②授業はあなたにとって満足なものでしたか？ 結果、平均 4.83 点

③授業内容は食生活に必要な知識を提供していると感じましたか？ 結果、平均 5 点

④授業を受け、食生活を送る上で食品成分に関する知識は重要と感じましたか？ 結果、平均 5 点

⑤授業内容をこれからの食生活に生かそうと考えていますか？ 結果、平均 4.91 点

上記5つのすべての質問に対して、受講生にとって非常に高評価であった。来年度も同様な評価となるよう努力していきたい。

5. 本授業の成績とその分布に関して

～昨年度との比較検討～

昨年度の平均点は77点、標準偏差は13点であり、秀・優・良・可・不可のそれぞれの割合は、14%・29%・21%・21%・11%であった（受験者27名）。

本年度の平均点は89.5点、標準偏差は7点であり、秀・優・良・可・不可のそれぞれの割合は、67%・17%・17%・0%・0%であった（受験者12名）。昨年度とは異なり、可・不可の評価を得た学生はいなかった。

本年度は、昨年度と比べ平均点が 12.5 点上昇し、標準偏差も低値を示したことから、受講生全員が非常に真面目に授業に参加し、試験勉強にも取り組んだことが推察され、先述の教員個別アンケート結果からも十分にうかがえる。本年度の平均点は、過去9年間の食物学の授業の中で最高の値であった。授業担当者として非常に喜ばしいことである。

6. 授業に対する学生の感想

(一部を抜粋し記述します。)

①「食物学」を受講したことにより、他の授業に直接的に繋がらなくても、話の繋がりが多々あったので、良い知識を身につけられたと思います。これからの授業もそういう場面があると思うので、楽しい授業であった他に、様々な分野に生かせる授業だと思いました。

②食品に含まれる栄養素や働きを丁寧に詳しく学ぶことができた。自分の食生活を見直すよい機会になった。この授業をとっていなかったら学ぶことができなかつたことがたくさんあったのでとてもためになった。

③内容が盛り沢山で覚えることが多く大変だったが、その分、自分の力になったと思う。以前に比べ、スーパーに行ったとき、食品・食物を見て栄養素や機能について考え、選ぶようになった。

④食物学の授業を受けてから、ふと自分の食事を見つめたり、食品表示をみてみたりという機会が多くなった。受講する前に思っていたよりも、食というものが自分の生活、身体に大きく関わっていることに気づかされ、1回1回の食事を考える楽しさを感じることができた。

⑤はじめは化学的なことを学ぶのかと身構えていたが思っていたより難しくなく、むしろわかりやすくてとても楽しかった。もっと食のことにについて学びたいと強く思えるような面白い授業だった。

⑥栄養素には関連していることがあることを知ったときに改めて栄養のバランスは重要だと思え、一人暮らしでもちゃんと食事を大切にしようと思えた。毎回の授業で難しいと感じることが多かったけど、小テストで復習することで内容がしっかりと定着していったと思う。

⑦今までほとんど化学を学んでこなかったので難しいと感じることもあったが、理解できるとより興味を持ちました。食物学は

自分の生活に関わっていることばかりなのでこれからの生活に活かしていきたいです。

⑧スーパーでの買い物のときに、何に気をつけるかを考えることができ、生活力が上がりました。

⑨この一年で受けた授業で一番やり甲斐があり、一番分かりやすかつたです。

以上の感想から、受講生は本授業を通して、「食」に対してさらに興味・感心を示し、食品の選択能力の向上が認められ、学んだことを、今後の食生活や食行動に活用していこうとしている様子がうかがえた。また、計13回にわたる小テストの実施も知識の定着に大きく寄与していることが推察された。

来年度11年目(11回目)の授業となるが、これからも家庭科教員および家庭科の教員免許取得を目指す学生に適した「食物学」の授業となるよう、さらに工夫を加え、充実化させていきたい。

来年度は是非とも、新型コロナ感染が収束し、全授業回、対面にて実施できることを切に願う。